

学位論文要旨

文学研究と文学教育の交差研究

— 世界観認識の癒着から分離へ —

広島大学大学院教育学研究科
教育学習科学専攻 学習開発学分野
カリキュラム開発領域

学生番号 D191110 氏名 李 勇華

1. 文学研究からしばらく離れ、文学教育をかいくぐる所以

本博論は第一部「ポスト・ポストモダンの彷徨と到達」と第二部「文学研究と文学教育の交差研究」からなっている。第一部は第一章から第五章までであり、この五章に対してのまとめが第六章であり、第二部は第七章から第十一章までであり、この五章に対してのまとめが第十二章である。

二〇世紀六十年代以後、構造主義・ポスト構造主義とされるポストモダン思想の文学理論が文学研究に多大な影響を与えたが、結局、文学研究が文化研究へとシフトし、文学が不要であることが唱えられている。文化研究へとシフトしなかった文学研究のほとんど、文献学に立ち戻って、文学研究その全体は、反動し、保守的になっている。そうすると、そもそも、文学研究はなぜ文学理論を受容したのか、ということをも反省する時期に来ているのではないか。しかし、節操のない今現在の文学研究は、これまでの文学理論における受容を反省しなかったどころか、さらに混濁しつつある。文学理論を受容した文学研究は、出口が見つからずに終わっている。

いうまでもなく、それはポストモダンを通過できなかった文学研究自身の問題であり、文学理論の問題ではない。ポスト構造主義とされる思想家のなかに、ポストモダンを通過し、ポストモダン以後のポスト・ポストモダン思想地平を切り拓いたロラン・バルト、ジャック・デリダなどの思想家がある。あるいは、最初からポスト・ポストモダン思想地平に立って思想を展開したヴァルター・ベンヤミンがある。しかし、ほとんどの文学研究はモダンからこれらの思想家の思想を読んでいたのではないか。

それはポスト・ポストモダン思想とは何か。それを教えてくれたのは、ポストモダン思想を通過できなかった文学研究ではなく、ポストモダン思想に出会った後、確実に悩んでいる文学教育である。すなわち、読みは一つなのか、それとも複数なのか。文学教室では、複数の読みが果たして、一つの読みに回収されることに耐えられるのか。これらの問題を解決するには、当然ながら、今現在の文学研究・文化研究に頼ることができない。これらの研究は文学教室での悩みを真摯に受け止められず、対峙できないからである。文学教室での悩みを悩み続ければ、ポストモダン以後のポスト・ポストモダンの思想地平に辿り着くことが可能である。

よく考えてみれば、大学などのアカデミックな文学研究ではなく、小中高の文学教育こそ、ポスト構造主義とされるポストモダン思想と共振しているのである。しかし、これまでの長い間、特に文学理論が流行っていた時期、文学研究があたかも文学教育に君臨し、文学教育を指導できるような存在であった。今から見ると、文学研究を相対化できるのは文学教育ではないか。

以上は、筆者がしばらく文学研究を離れ、文学教育をかいくぐることを考えた所以である。

2. バルトの到達点と第三項理論

文学教室での悩みを真摯に受け、それと対峙するために、筆者は文学研究をリセットして（いうまでもなく、筆者の文学研究はたいしたものではない）、ロラン・バルトの思想を読んで始めた。しかし、バルトを論じるのはあまりにも難しい。

フランス国内では、アントワーヌ・コンパニオン、ツヴェタン・トドロフなどのバルトの弟子は、基本的にバルトの思想、正確に言えば、「作者の死」と「作品からテキストへ」を中心とするバルトⅡ期以後の思想を否定的に見ている。日本国内では、石川美子などのバルトの訳者は、バルトの思想を完全に否定しなかったが、あえてバルトを理論家ではなく、作家と呼んでいる。バルトの理論も時代とともに古びてしまうという宿命を免れないとされたからである。最近、桑田公平、滝沢明子などのバルトの専門家は、バルト研究を一新するつもりで、バルトⅢ期の『恋愛のディスクール・断章』、『明るい部屋』などに取り組んでいたが、しかし、なぜ、最晩年のバルトが取り上げて分析されなければならないのかの必然性、あるいはバルトⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期の関連性は、彼らの研究によっては説明できない。

日本の文学研究におけるバルトの受容においては、バルトⅠⅡ期に突入した蓮實重彦もいるが、ほとんどは「物語の構造分析」というバルトⅠ期に止まっている。その例として、本博論の第11章で中村三春のバルト受容を取り上げて分析した。

そこで、バルト思想の可能性を考えさせるのは田中実の『小説の力』（大修館書店）と『読みのアーキーを超えて』（右文書院）である。田中のバルトについての理解も変わりつつあったところもあるが、バルト思想の到達点は田中に唱えられた第三項理論のような世界観認識である。これが本博論のもっとも重要な結論である。バルト思想展開においては、たしかに文学からは離れた時期もあったが、それは第三項理論のような世界観認識に基づいて定義できる「文学」のためのことである。バルトの思想展開において、もっとも重要なのは、「作者の死」と「作品からテクストへ」を中心とするバルトⅡ期である。

トートロジーと聞こえるかもしれないが、第三項理論を参考としなければ、バルトの思想がどこへ深まりつつあったのかということがわからない。そしてバルトの文学理論を参考としなければ、ポスト・ポストモダン思想地平を切り拓いた第三項理論についての位置付けが難しい。筆者にとって、田中実とロラン・バルトというペアを同時に読むことによって、やっと「文学」とは何か、「文学」研究のしかるべき姿とはなんなのかということが分かったのである。

3. 新しい世界観認識に基づいて再定義された「文学」、「哲学」、「政治」

ポストモダン思想とは、唯物反映論と第三項理論という相異なる二種類の世界観認識の混在である。この二種類の世界観認識から分離された第三項理論によって築かれるのはポスト・ポストモダン思想である。バルトⅢ期のほかに、ベンヤミン、アーレント、ラカンなどの思想家も、ポスト・ポストモダン思想を抱えている。それを論証するために、本博論の前半では、バルトⅢ期とこれらの思想家との比較を試みたのである。

もし第三項理論のような新しい世界観認識から展望すれば、本博論の第1章から第5章までの分析によって明らかにされたように、ポスト構造主義以後に位置づけられるのはフェミニズム文学理論でもなければ、アラン・バディウに擁護された「共産主義」（岡本裕一郎『フランス現代思想史』中公新書）でもなく、デリダの脱構築、ベンヤミンのアウラ概念、アーレントの公共性などである。ラバルトの「詩、哲学、政治」（ラクー＝ラバルト『ハイデガー 詩の政治』、西山達也訳、藤原書店）が仄めかしているのは、新しい世界観認識に基づいて再定義された「文学」、「哲学」、「政治」である。ここで、「哲学」を「形而上学」や「思想」などに置き換えてもよからう。

文学研究はまず「文学」についての定義から始まる。その点において、哲学研究も、政治研究も同じであろう。

4. 〈近代小説〉の読み方・読まれ方

文学理論はまず「文学」の理論である。「文学」の理論は具体的に文学作品の読みを通して探ることができる。簡単に言えば、読みの実践から引き出せるのは「文学」の理論である。

それでは「文学」に求められる読み方・読まれ方とは何か、ということについて、本博論の後半の第7章から第11章まで、中高の国語教科書にも採用された名作を取り上げて分析してみた。森鷗外の『舞姫』、『雁』、夏名漱石の『夢十夜・第六夜』、魯迅の『故郷』、三島由紀夫の『美神』、芥川龍之

介の『羅生門』、宮澤賢治の『注文の多い料理店』などの作品が〈近代小説〉なのに、〈近代の物語文学〉として読まれたことを説明するために、安藤宏、藤井省三、高木信、松澤和宏、中村三春たちの読みを批判的に取り上げて分析した。

〈近代小説〉の語り手は〈機能としての語り手〉である。一つの眼差しのなかに囚われる語り手は、〈機能としての語り手〉ではなく、複数の眼差しの「客観関係」を同時に語る語り手は〈機能としての語り手〉である。ジュネットのナラトロジーでは、語り手の語る技法などが説明されているが、語り手と語り手に原理的に語られない世界との「客観関係」は欠如している。本博論にとって、〈近代小説〉を読むにあたって、参考とされるのはジュネットのナラトロジーではなく、バルトの『明るい部屋』である。

いわゆるフィクション、虚構、騙り／語りなどの発想では〈近代小説〉を定義できない。〈近代小説〉において、語られる真実と語れる虚構が等価なのである。いずれも、語りのなかの産物、いわば言葉で紡ぎだされる対象にすぎない。語り手に語られる対象が、語り手に永遠に語られない「外部」から捉え返されるというメカニズムを示すのが〈近代小説〉である。

5. これからの展望

本博論で明らかにされたのは、(1) バルト生涯の思想展開の有り様、(2) それと第三項理論の共同性、(3) 第三項理論に基づいて定義された「文学」、(4) そして「文学」に求められる読み方・読まれ方である。これから、もっと広い範囲のなかで、ポスト・ポストモダンとは何かということを考えてみたい。ポスト・ポストモダン思想を解明する面では、本博論のなかでバルト思想と比較する際、取り上げられたベンヤミン、デリダ、アーレントなどの思想家の思想を、バルト生涯の思想展開を辿ったように、辿ってみたい。読みの実践では、第三項理論に基づいて定義された「文学」に求められる読み方・読まれ方を〈近代小説〉だけではなく、俳句、詩歌などにも応用してみたい。

文学教育をかいくぐって、これまでの文学研究における理論受容を反省・批判しながら、あらためて出発してみたい。そのために、もう一度、田中実の『小説の力』と『読みのアナーキーを超えて』に立ち戻ってみるのが筆者にとっては必要である。読みのアナーキーを超えることは、ポストモダンを超えることである。しかし、「読み」の今現在は依然としてエセのアナーキーに止まって、昏迷していると思うのは、筆者だけではないであろう。このような現状を改革できるのは、文学研究・文化研究ではなく、ポストモダンに出会って、悩みを抱えている文学教育である。そのために、まず、真摯に文学教室でぶつかる複数の読みを受け止め、それと対峙するべきである...